

真宗文庫

---

# 親鸞の証明

—「正信偈」のころ—

寺川 俊昭    大河内 了悟  
廣瀬 杲    一樂 典次  
宮城 颯    両瀬 正雄



---

東本願寺出版



もくじ

はじめに

釈尊出世の本懐

- 祖先の呼びかけ (12) 真実のことは (23) 如来の光明 (33)
- 真宗の教えの要 (41) 釈尊出世の本懐 (51)

寺川 俊昭 11

信心の利益

- 凡聖一味 (62) 心光常護 (71) 慶喜横超 (81)
- 諸仏称讃 (91) 難信をあげてかえって勸信す (101)

大河内 了悟 61

本願念仏の伝統

- 本願念仏の伝統 (112) 龍樹菩薩の出世 (121)
- 龍樹菩薩のお仕事 (130) 天親菩薩と浄土論 (139)
- 真実の信心 (147) 真実の救い (156)

廣瀬 杲 111

信心の境地 ..... 一楽典次 165

本師ということ (166) 天親菩薩のみこと (176)

弥陀の回向 (186) 修行の仏教から信心の仏教へ (197)

信心の境地 (208) 世間虚仮 (218) 万徳の名号 (227)

信と不信 (237) 愚禿の祖先 (247)

問いの深さ ..... 宮城 顕 259

手に信せてさぐるに (260) 仏独り二衆とともに (272)

顕すということ (282) 絶対の信頼 (293) 凡夫・韋提希 (302)

われこれ故仏 (312) 問いの深さ (323) わが身 (335)

人類解放の道 ..... 両瀬 正雄 345

面授の師 (346) 人類解放の道 (359) 『選択集』の眼目 (371)

弘経の七祖 (382)

〔付録〕「正信念仏偈」全文 ..... 〈意識〉金子 大榮 393

## 〈凡例〉

\*本文中の「真宗聖典」とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

\*偈文のふり仮名は、真宗大谷派教学研究所編『正信偈』（東本願寺出版発行）によっています。

\*本書は一九八一年初版発行の『真宗入門』『正信偈』の「こころ」を文庫化したものですが、文庫化に際し東本願寺出版の責任の下、以下のとおり編集を加えました。

・読みやすさを考慮して一部文言を修正、ルビを整理・追加し、仮名遣いを現代仮名遣いに統一しました。

・引用文は可能な限り原典に基き確認し、引用文と原典と思われる文とで意味・内容に関わる差異がある場合は、執筆者の依用した典拠が異なる可能性、または執筆者の間書きや趣意である可能性を考慮して、当時のまま表記し、註に示しました。

・寺川俊昭氏による「釈尊出世の本懐」にのみ各項冒頭に金子大榮氏による「正信偈」意識が掲載されていますが、意識全文を付録として巻末に掲載しました。意識は法藏館発行の『意識聖典』（金子大榮編著）より転載しています。



## はじめに

本書は、一九八一年初版発行の『真宗入門』『正信偈』のこころ』を再編集し、文庫化したものです。

「正信偈」は、浄土真宗の宗祖親鸞聖人が、その主著である『顕浄土真実教行証文類』（教行信証）の中におかれた偈（うた）であり、正式な名を「正信念仏偈」といいます。

そこには、生きとし生けるものをもろさず救わんと誓う本願を發された法蔵菩薩の物語に始まり、その本願を説き開かれた釈尊（お釈迦さま）の教説。そして、本願に自他の生きる道を見出された、インド・中国・日本の七人の高僧方の伝記と教えの要が綴られています。「正信偈」のわずか百二十句には、浄土真宗の歴史すべてが撰められているといっても過言ではありません。

親鸞聖人がこの歴史上に三国七高僧を挙げられているのは、釈尊から聖人に

至るまで、本願念仏の教えが正しく伝えられてきた伝統を明らかにする意図があるのは確かなことですが、それだけではありません。

親鸞聖人は、この七高僧について語られる直前に「如来の本誓ほんぜい、機きに応ぜることを明かす」と述べられています。人（機）には生まれた環境や能力など、様々な差異ちがいがあるけれども、阿弥陀如来の本願こそが、その人その人の在り方あに応じ救い遂げる。そのことを、異なる時代社会に生まれながら、本願念仏ひとつに釈尊の本意を見出された高僧方の生きざまと、遺のこされた教言によって証明しているのです。

そして、親鸞聖人ご自身も「弥陀の五劫思惟ごこうしゆいの願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』後序）といわれるように、この本願の「応機」するはたらきに出遇であったがゆえに、「共に同心に、ただこの高僧の説を信ずべし」と、私たちにも信を勧められているのでしよう。

本書では、近現代にかけ真宗教学界を牽引された六名の先師方が、それぞれの言葉で「正信偈」の味わいを語ってくださっています。その言葉を通して、



一人でも多くの方が「正信偈」のところに触れ、この現代を生きる「わたし一人」にはたらきかけてやまない本願念仏の教えを聞思もんしする機縁となることを願っています。

最後に、このたびの文庫化にあたり、ご許可を賜りました先生方のご遺族の皆様、心より御礼を申し上げます。

二〇二二（令和四）年七月

東本願寺出版



釈尊出世の本懐

寺川 俊昭

## 祖先の呼びかけ

歸命無量壽如來

南無不可思議光

読みかた

無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。

(真宗聖典二〇四頁)

「きみようむりようじゆによらい なむふかしぎこう」∴。この「正信偈」は昔から、真宗教団のもっとも大切なおつとめとして、長い間うけつがれてきました。ついこの間まで、真宗門徒の多くの家庭では、朝晩には家族がみんな仏前に集まって、このおつとめをするのが普通でした。厳しい家庭では、子どもたちでもこのおつとめをしなかったなら、ご飯をたべさせてもらえなかったそうです。おなじ屋根の下で暮らす家族のものが集まって、声をそろえて仏前で宗祖・親鸞聖人のつくられた信心の歌をうたう、そこに真宗門徒の家庭

生活の、すばらしい伝統があるのではないのでしょうか。

こういうおつとめは、単に古くさいしきたりとか、封建的ほうけんてきな型にはまった儀式しぎとかいって、軽くみてはいけないのでしょうか。信心とか信仰生活というものは、やはりこういうおつとめに具体的にあらわれてきますので、わたしは深い信仰をもっているのだが、ああいう型にはまった、形式的なことはきらいなのだというのは、何か信仰生活のおこたりというか、信心のおろそかなことをあらわしているにほかならないように思われます。ともすればおこたりがちになるのが、いつわりないわたしたちのすがたですが、毎日のおつとめがきちんと、丁寧につとめられるところこそ、信仰が生活の中に生きている、具体的なすがたがあるのではないのでしょうか。

ことに現代は、自由とか個人主義の風潮ふうちょうがとても強くなって、家庭といっても、昔のようなまとまりはなくなり、何だかバラバラの個人の集まりというようなことになってしまいました。親は親、子は子で、その間での意見の通じ合いということが、なかなか難しくなりました。話し合いということの大切さは

盛んにいわれますが、それだけで家庭内の意見や気持ちの通じ合いができるとも思われません。しらじらしい隙間風が吹きぬけるような状態で、お互いがしつくりとつけ合えない不満をもちながら、バラバラでむやみに忙しい毎日を送っている。気がついてみますと、わたしたちの家庭生活は、こんな状態になってしまいました。

現代の家庭生活がこんなありさまですから一層のこと、わたしは「きみよむりようじゅによらい」に始まる、伝統的なおつとめの大切さを思います。仏前にすわって「正信偈」をとなえる時、わたしの胸にはいろいろな思いが去来します。この時、無心むしんに仏さまの徳を、そして宗祖の徳を讃嘆さんたんするといったら嘘になるでしょう。おつとめをしながらも、わたしの胸中には、実にさまざまな思いが去来します。が、その中にふと、一種独特の感情がわき起こってくるのを感じるのである。わたしの血肉の中から、一種独特の、なつかしい感銘かんめいがわき起こってくるのです。それをわたしは、浄土真宗の歴史的な感情と呼びたいのです。そしてそれが、祖先の呼び声に違いありません。わたしたちはおつとめ

において、祖先の呼び声に呼びかけられるのです。

わが父母が、わが祖父母が、そして遠いわが祖先が、家族とともに仏前にあい集まって、この同じ「正信偈」をつとめてきたのです。その生活の中で千萬無量の思いをこめて、真剣におつとめをつとめてきたのです。そして同じように、「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」と、正信念仏の徳を讃嘆してきたのです。同じようにこの念仏の歴史の中に生まれ、そこに死んでいったのです。そこに本願念仏の本当に生きたすがた、肉体化があったのではないのでしょうか。一体、本願念仏というけれども、それはどこにあるのでしょうか。どこに生きてはたらいにいるのかといえば、それは祖先の歩みにです。念仏を喜んで生きた祖先たちの生涯こそ、本願念仏の肉体化なのだ、わたしはあえていいたいのです。宗祖は群萌ぐんもうとおっしゃいましたが、そのことば通り、雑草のように名もなく、社会の片すみで歴史の中にうもれてしまったわしたちの祖先。それを本当に尊敬できるのが、念仏のところを開けてくる境地きょうちではないのでしょうか。

「この世の別れが最後ではない。またあう世界があるのだ」。ある葬式の日、亡くなった人の死をいたんで、一人の方がこのようなことばをはなむけしておられました。浄土真宗の信仰を、素朴そぼくに、しかも簡潔かんけつに言い切った、すばらしいことばだなと思ひながら聞いたことですが、そのまたあう世界の一つが、この祖先の呼びかけを聞くことにほかならないと思ひます。人間が肉体をもつて生きてゐるかぎり、わたしともっとも因縁いんねんの深かった肉親、この血のつながりを通して本願念仏を讃嘆することも、また許されるに違いありません。

祖先崇拜すんぽうはいだとか、個人主義こじんしぎだとかいうような、いかにも現代風の分別ぶんべつをはなれて、わたしたちが虚心きょしんに、この祖先の語りかけに耳をすませるならば、わが祖先の歩みは、無限に眼前に展開してまいります。信仰のあつかった母、念仏を喜んだ祖父。これら無数の方々が、時に厳しく、時にはなつかしく、今のわたしたちに語りかけます。そこに本当の、わが祖先との対面があるのではないのでしょうか。かつてわたしたちの祖先であり、今は仏となられた方々の声、すなわち教えとしてわたしたちに語りかける声に呼びかけられて、その方々の本



当の内心の声、つまり願いを知るのではないでしようか。この祖先の願いに触れるというところに、祖先とわたしたちが本当に一つになれる世界が開けています。

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり

（『教行信証』後序・真宗聖典四〇二頁）

といわれます。この限らないのちの触れ合いまじわる世界、そこに「寿命と光かぎりなき仏ほとけに帰命かへみことしたてまつる」（『正信偈』金子大榮意識、本書三九四頁）という念仏の徳が豊かに輝く世界があるのでしよう。

このように、たとえばおつとめの時に呼びさまされる歴史感情によって、わたしたちは遠い祖先と感応かんのう道交みちまじりし、触れ合う世界を知りました。ことに現代の生活は、いつとはなしに、根なし草のような、何か底の浅いふわふわしたもの

になつてしまつたのですから、それだけに一層、わたしたちのいのちの根源を思い、それに触れることが大切なのでしよう。遠いこの根源と密接みっせつに結びついて、はじめて現代の家庭生活に深い落ち着きが生まれます。遠い祖先と遙はるかな子孫とを思い、そこにはじめて、本当に責任のある生活が生まれます。祖先からうけついでこの宝を、大切に子孫に手わたしていかなければならない。そこに大きな使命があります。使命をもつた時、人間は本当に充実した、はりのある生活ができるのではないのでしょうか。こういうところに、わたしは、深い意味での家の一貫性いっかんせいがあるのだと思います。

こういう歴史感情に結ばれて、一家のものが仏前にあい集つどうておつとめをする。そこに、ともすればバラバラになつてしまいがちな家族が、普通いわれるような話し合いではなくて、もっと深いところで了解しあい、うなずきあい、そして和合することのできる場所があります。そういう浄土真宗のおつとめとして、もっとも親しまれてきたのが、この「正信偈」なのです。毎日の家庭生活をはじめ、すべての会合の時、「正信偈」のおつとめをするのが、浄土真宗

のしるしですから、「正信偈」は、いわば浄土真宗の骨髄こつすいです。

「正信偈」は、ただしくは「正信念仏偈しょうしんねんぶつげ」ですが、これは「念仏を正信する歌」、あるいは「正信の念仏の歌」という意味の題でしょう。ですから、本願の念仏というか、念仏をとなえるところに、そのもとである如来のお心、本願のお心というものを信じさせていただく、そういうことがあるに違いありません。念仏のところに、わたしの救いがあるといわれますが、そのわが名をとなえよと仰おほせられるところに、深い本願のまことを知らせていただくのですから、本願を信じることと、念仏をとなえることとは一つなのだ。こういうお気持ち、宗祖は「正信念仏」ということばに記して、明らかにされたのであり、うと思いません。

その「正信偈」の最初のことばは、「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」。無量寿、不可思議光というまでもなく、阿弥陀の意味ですから、「寿命いのちと光かぎりなき 仏に帰命したてまつる」とは、南無阿弥陀なむあみだぶつ仏

の意味といいますか、中味を開いたものにほかなりません。念仏のところに救いがあるということは、つまり、念仏によって人生の中に、かぎりなき寿命いのちと光とを感じて生きてゆくということです。かぎりなき寿命いのちと光といっても、何かつかみどころのない、漠然としたものを感じないでもありませんが、わたしは、このかぎりなき寿命いのちというのを、念仏のところに体験される祖先との対面、そこに感じられる無限に深いいのちの触れ合いというところに自覚されるもの、とこのように了解してみました。

今一つの光とは、もちろん人生を照らす光でしょう。わたしの町は、山の中にありますので、一晩中明かりがついていて、本当の暗闇くらやみというものがなくなつた都会とは違って、本当にまっくらな、一点の明かりもない闇があります。そんなまっくらな闇の夜道を歩いていて、ふと、無明むみやうじょうや長夜じやうやということをし、強く感じたことがあります。無明長夜を、まざまざとこの眼で見た思いがしたことがあります。おそらく人生の旅路の中で、自分ではまったくどうしてよいかわからない、「ああ、暗いなあ」とつぶやくほかはないような、まさに無

明の長夜に触れたものであるならば、この、かぎりなき光の如来を、絶対の救いとして仰ぐことの意味が、よくわかるのではないでしょうか。

光は智慧のかたちといわれます。かぎりなき光は、かぎりなき智慧をあらわすとすれば、この光に照らされるといことは、何かそこに、本当の智慧、人生の道理を正しく見きわめる智慧が、おのずと身につくといいますか、そういう眼が一つ開けてくるといことだともいえます。そして、そういうおのずと開けた智慧の眼によって、同時に、かぎりなき光につつまれ、かぎりなきいのちの中にある自分を見出すのではないでしょうか。念仏が救いだといわれるのは、このようなことであるに違いありません。

そうしてみますと、このかぎりなき寿命と光というものは、人間のいのちの根源とでもいいますか、何か人間のいのちがそれに触れなければ、本当に落ちていけないものをあらわしているようです。自分のいのちがそこから出てきたものと、自分の魂のふるさと、そういうものが、かぎりなき寿命と光であらわされています。「寿命と光かぎりなき 仏に帰命したてまつる」とは、まさにこ

の人間の魂の本当のふるさとに帰ってゆくことです。いのちの根源、魂のふるさとに目覚め、そこに帰ってゆく、人間の魂の大きな運動です。そしてこの根源、ふるさとこそ、一如いちじよの世界ですから、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」こそ、広く大らかにして極まりのない仏法が、今ここに生きてはたらく、いのちに満ちたすがたなのです。